

トマスの《enuntiabile》に関する一考察

—*Sum. theol.* I. q. 14, a. 15, ad 3—

山 田 晶

1. トマスは『神学大全』第1部14問15項において、「神の知は変りうるか」
Utrum scientia Dei sit variabilis. という問題を提起している。「神の知」というこ
 とは二つの意味にとられうる。一つは、神が知ることであり、一つは、神を知るこ
 とである。神を知るという意味での神の知がいかにして可能でありいかにして獲得
 されるかについては、既に第12問「神はわれわれによりいかなる仕方でも知られる
 か」*Quomodo Deus a nobis cognoscatur.* において詳論された。広く考えるならば、
 われわれが神について有しているすべての知識の体系としてのテオロギアそのもの
 が、したがってまた『神学大全』の全体がこの意味での神の知となるであろう。し
 かし第14問で取扱われる神の知はその意味のものではなく第一の意味のものである。
 すなわち神が知るという意味での神の知である。ところでこの意味での神の知は、
 何を神は知なのかという対象の観点から見られるとき、更に二つに分たれるであろ
 う。一つは、神が神自身を知る場合であり、一つは、神以外のものを知る場合であ
 る。もっともこの二つの知は、知るはたらきに即していえば一つであって分けるこ
 とができない。なぜならば神は神自身を知ることにおいて同時に他の一切のことが
 らを知るからである〔第14問5項〕。しかし対象に即していえばこのように分つこと
 ができる。現に第14問においても、トマスはまず神の自己認識について論じ〔第2,
 3項〕、ついで神以外のものについての神の知の考察に移るのである〔第5項以下〕。
 ところで神の神自身についての知に関していうならば、かかる神の知が不変である
 ことはあきらかである。なぜならば、神の本質は不変であり〔第9問〕、神の知性
 認識は神の本質そのものである〔第14問4項〕から、神の自己認識が不変であるこ
 とは疑う余地がないのである。このことが問題となるのはむしろ神以外のものに関
 する神の知の場合である。神以外のもの *alia a se* は被造物であり、被造物はすべ
 て、質料的なものと同質料的なものを含めて、何らかの意味で可変的である〔第

9問第2項〕。とりわけ質料的被造物は、その質料性のゆえに時間的世界に存在し、たえざる転変の過程の中に在る。そこで神が神以外のものを、特に質料的被造物を認識の対象とするとき、この被造物の変性が何らかの仕方でも神の知に変化を与えることはないであろうか。ないとすれば、それはいかなる根拠にもとづいてないといわれるのであるか。これが本項において論ぜられるべき中心問題である。

2. 神の知は変わりうると主張する三つの異論があげられている。私はそのうち特に第三の異論に注目し、それを分析し、またこの異論に対する答を考察し、そこに見出される問題について考えてみたいと思う。第三の異論は次のように主張する。一神はキリストが生れるであろうことを知っていた。今はしかし、キリストが生れるであろうということを知らない。なぜなら今は、キリストが生れるであろうことはしないからである。それゆえ神は、かつて知っていたことを悉く、今知っていない。ゆえに神の知は可變的である。Deus scivit Christum nasciturum. Nunc autem nescit Christum nasciturum: quia Christus nasciturus non est. Ergo non quidquid Deus scivit, scit. Et ita scientia Dei videtur esse variabilis. —この異論を分析してみよう。「神はキリストが生れるであろうことを知っていた。」ここにキリストの名があげられているが、これはキリストでなくともよい。ソクラテスでもプラトンでもよい。名もない農夫でもよい。否、人間でなく犬や猫でもよい。要するに時間的世界にいつか存在する個物であれば何でもよい。しかし今は異論にあげられた例に従って、キリストについて考えることにしよう。キリストは或る特定の時にこの時間的世界に生れた。しかし神はキリストが生れる以前に、既に永遠から、キリストの生誕を予知していた。キリストの生誕は、それが実現される以前から既に神の予知のうちに在ったのである。ではいかなる仕方でも在ったか。キリストが生れる迄はそれは、「キリストが生れるであろう」Christus nasciturus est. という知として神のうちに在ったのである。つまり神はキリストが生れる迄はそのことを、「生れるであろう」という未来時称の命題によって表示されるべきことがらとして知っていたのである。しかるに今や、キリストは生れた。神は今、「キリストが生れた」Christus natus est. ことを知っている。「生れた」という完了時称の命題によって表示されるべきことがらとして知っている。しかし今、神は「キリストが生れるであ

ろう」ということを知らない。なぜなら既に生れてしまった以上、「生れるであろう」ということはもはやないからである。quia Christus nasciturus non est. したがって神は、かつて持っていた「生れるであろう」という知を今は持たず、その意味で神は今、キリストは生れるであろうということを知らない。Nunc autem nescit Christum nasciturum. すなわち神は、かつて知っていたことを今は知らない。これは神の知が変ったことを意味する。ゆえに神の知は変りうる。これが異論の論旨である。一異論はキリストを例にして論じているが、上にも述べたように、これはかならずしもキリストでなくともよい。時間的世界に存在するあらゆることについて同じことがいえる。時間的世界にいつか存在するものはすべて、存在する以前には「在るであろう」。現に存在している限りにおいては「在る」。存在を終えた後には「在った」。このように時間的世界に存在するものはすべて、「在るであろう」から「在る」へ、「在る」から「在った」へと目まぐるしく転変する。ところで神はそれを悉く知っているのであるから、そのものが「在る」以前には「在るであろう」という知が、「在る」以後には「在った」という知が、神においては一切のものについて所有されている。とすれば神においては、時間的世界の転変に応じて、一切の事物についての一切の転変が、「在るであろう」「在る」「在った」の知として転変している筈である。かく考えるならば、神の知は変りうるどころの話ではない。神の知ほどめまぐるしく転変しているものは何もないといわなければならない。

3. この問題に対するトマスの主文における答はきわめて簡単である。主文においていわれる。一神の知は神の本質そのものである〔第14問4項〕。しかるに神の本質は全く不変である〔第9問第1項〕。ゆえに神の知は全く不変でなければならない。Cum scientia Dei sit eius substantia, ...; sicut substantia eius est omnino immutabilis, ...ita oportet scientiam eius omnino invariabilem esse. —これはきわめて原則的な、殆んど形式的といってもよいような答である。たしかに、神の知が神の本質そのものであり、また神の本質が絶対に不変であるというこの二つの根本命題に立脚する限り、神の知の変性は絶対に認めることができない。しかもこの二つの根本命題は既に証明されているのであるから、そこからいわば論理的必然性を

もって神の知の不変性は帰結されるのである。しかし問題となるのは、既に述べられたように〔本論文第1節〕、神の知が神以外のもの、すなわち被造物、とりわけ時間的被造物にかかわる場合である。神は神以外のものをも知悉し、時間的被造物についても知悉している。しかるに時間的被造物は可変的である。とすればこの時間的被造物の可変性が、それについての神の知に何らかの可変性を生ずることはないかという疑問はどうしても起ってくるのである。この疑問に対してもしかし、原則にもとづいて一応の答を与えることは不可能ではない。神は自分自身を知ることにおいて自分以外の一切のものを知る〔第14問5項〕。しかるに神の神自身に関する知は不変である。ゆえに神以外のものについての知も不変でなければならない。このように答えることもできるであろう。しかしこれはあくまでも原則的形式的な答であって、ア・プリオリな原則からみちびき出された「不変であらねばならぬ」oportet esse invariabilem という答である。しかしこれだけでは、異論に対する答としては十分でない。たとえ「神の知は不変である」というのが最後の結論であるとしても、時間的に転変する事物についての神の知がそれにも拘らず不変である理由が、異論の提出者に対し納得のゆく仕方で与えられなければならない。このことをトマス自身、誰よりも良く知っていたと思われる。主文における原則的な答は上記のようにきわめて簡単であるが、この簡単な主文の答において自己の主張の結論を明確にしたトマスは、異論に対してはていねいに答えているのである。われわれは、始めの二つの異論に対する答は省略して、われわれにとって関心的である第三異論に対する答の考察に直ちに言うことにしよう。

4. トマスは、この異論に対する彼自身の答を出す前に、まずこの問題に対する先人の答を紹介し、ついでそれを批判する。先人の答としてあげられるのは「古の唯名論者たち」antiqui nominalesの説である。彼らによれば、「キリストは生れる」「生れた」「生れるであろう」というのは同じ《enuntiabile》である。なぜならばこの三者によって同じことがら eadem res が、すなわち「キリストの生誕」nativitas Christi が意味されているからである。この説によれば、神はかつて知っていたことを、今も悉く知っており、したがって神の知は不変であることになる。なぜなら神は今、「キリストが生れた」ことを知っているが、これは「キリストが生れるで

あろう」というのと同じことがらを意味しているからである。Secundum hoc sequitur quod Deus quidquid scivit, sciat: quia modo scit Christum natum, quod significat idem ei quod est Christum esse nasciturum。一ところで「古の唯名論者たち」とは誰を指すのであろうか。オッタワ版スノマ第一巻の脚註(108 a 40)によれば、アベラルドゥスであるという。しかし今はその歴史的考証に立ち入ることを差し控えてことがら自体に注目し追求をすすめることにしよう。彼らはこの問題を次のような仕方でも解決しようとしたのである。すなわち彼らによれば、「キリストは生れる」「キリストは生れた」「キリストは生れるであろう」は同じ《enuntiabile》である。《enuntiabile》とは何であるか。それは「命題」enuntiatioによって表わされる意味内容としての「ことがら」である。たとえば「ソクラテスは坐っている」という命題は、「ソクラテス」と「坐っている」から成り、「ソクラテス」も「坐っている」もそれぞれ何らかの意味を表示しているが、この両者から成る「ソクラテスは坐っている」は、「ソクラテス」の意味とも「坐っている」の意味とも区別された、この命題によってのみ表示されるこの命題独自の意味を有している。それは「ソクラテスは坐っている」という命題によって意味されている「ことがら」であり、それがこの命題に対応する《enuntiabile》である。ところで彼らによれば、「キリストは生れる」「キリストは生れた」「キリストは生れるであろう」という命題は、命題 enuntiatio としては三つであるが、それによって意味されている「ことがら」としての《enuntiabile》は一つである。なぜならこの三つの命題は同じことがらを表わしているからである。その同じことがらとはすなわち「キリストの生誕」である。それゆえ上記の三命題は同じことがらを表わしている限りにおいて、《enuntiabile》としては同一である。一このように解することによって、異論に対しては次のように答えられる。キリストが生れる前に、神は「キリストが生れるであろう」という命題によって表わされることがらを知っていた。キリストが生れた今、神は「キリストが生れた」という命題によって表わされることがらを知っている。しかしここから、「ゆえに神の知は変る」ということは帰結しない。なぜなら「キリストが生れるであろう」という命題によって表わされることがらと、「キリストが生れた」という命題によって表わされることがらとは、「ことがら」としては同じであり、同じ《enuntiabile》だからである。そして神は命題を知るのではなく、

命題によって表わされることがらとしての《enuntiabile》を知るのである。しかるにこの《enuntiabile》は、「生れる」「生れた」「生れるであろう」という時称の相違にかかわらず同じなのであるから、たとえ時称が変わってもことがら自体に関する神の知が変わったことにはならない。したがって「神は知っていたことを悉く、今も知っている」Deus quidquid scivit, scit. といつて何ら差支えない。ゆえに神の知は不変である。—このように彼らは、命題 enuntiatio と、それによって表わされることがらとしての《enuntiabile》とを区別し、前者は時称において過去・現在・未来と変化しても後者は不変であり、しかも神が知っているのはまさにこの不変のことがらとしての《enuntiabile》であるとすることによって第三異論に答え、神の知の不変性を守ろうとするのである。

5. トマスは、唯名論者たちの説を紹介した後に、はっきりと、この説は偽であると断言している。Sed haec opinio falsa est. 偽である理由は二つあげられる。第一に、命題の部分が異れば、命題によって表わされていることがらとしての《enuntiabile》も異なるからである。diversitas partium orationis diversitatem enuntiabilium causat. 唯名論者たちは、「キリストは生れる」「生れた」「生れるであろう」という三命題は、命題としては異なるにしてもそれによって表わされていることがらとしては同じであるという。これに対しトマスは、否、命題が異ればそれによって表わされていることがらとしての《enuntiabile》も当然異ってくるという。だからトマスによれば、「キリストは生れる」「キリストは生れた」「キリストは生れるであろう」という三つの命題は、決して一つのことからではなく三つの異なることがらを表わし、それぞれの命題に対しそれぞれ固有の《enuntiabile》が対応するのである。その理由は、「ある」「あった」「あるであろう」が命題構成の不可欠の部分成すことにある。したがってこの部分が変れば、当然命題の意味も変わってき、したがって《enuntiabile》も変わってくるのである。いま命題について少し一般的に考察して、いわゆる唯名論者たちとトマスとの《enuntiabile》についての考えの相違を明確にしてみよう。命題は最小限二つの部分から成立っている。すなわち主語（S）と述語（P）とである。さきの例によれば、「キリストは生れる」という命題において「キリスト」は（S）であり「生れる」は（P）である。そして「キリストは生れ

る」なる命題は一般的には「(S)は(P)である」という形で表わすことができる。ではこの場合、「生れる」「生れた」「生れるであろう」の変化はどのように考えたらいいであろうか。それは「ある」が「あった」「あるであろう」に変ることだと考えることができる。すなわち「(S)は(P)である」「(S)は(P)であった」「(S)は(P)であるであろう」と変るのである。ところで「(S)は(P)である」とは、(S)と(P)との結合(S P)が「在る」ことだと考えることができる。さきの例を用いるならば、「キリストが生れる」とは、「キリスト」と「生誕」との結合、すなわち「キリストの生誕」が在ることだと考えることができる。一般化していえば、「(S)は(P)である」とは「(S P)が在る」ことであり、「(S)は(P)であった」とは「(S P)が在った」ことであり、「(S)は(P)であるであろう」とは「(S P)が在るであろう」ことである。つまり(S P)に「在る」「在った」「在るであろう」が附加されることによって、同じことがらについての現在・過去・未来の命題ができるのである。ここまで考えてきて、もとにもどって唯名論者とトマスとの《enuntiabile》についての見解を比較すると、その相違は次の点にあることが明かになる。すなわち唯名論者は(S P)を《enuntiabile》の本質と考え、「在る」「在った」「在るであろう」は非本質的偶然的な附加にすぎないと考える。すなわち「キリストの生誕」が《enuntiabile》の本質であって、それがいつ在るか、在ったか、在るであろうかということは《enuntiabile》にとってはどうでもよいことであると考ええる。神にとって重要であるのは「キリストの生誕」ということがら自体であって、それがいつ起るか神にとってどうでもよいことになる。ここからして、「在った」を知ることも「在る」を知ることも「在るであろう」を知ることも、神にとっては同じことであり、したがって時の変化は神の知に変化を与えないことが帰結する。この説によれば、神の知が不変であるのは、神が時の変化によって左右されない、その意味で時間を超越したことがら自体としての《enuntiabile》を認識しており、かかることがら自体は不変であるからに外ならない。これに対し、トマスにおいては、《enuntiabile》を構成するのはただ(S P)だけでなく、まさに「(S P)が在る」「(S P)が在った」「(S P)が在るであろう」というそれぞれの命題が、それに対応する独自の《enuntiabile》を有している。ゆえにトマスによれば、「キリストが生れる」「キリストが生れた」「キリストが生れるであろう」という三つの命

題は、命題として異なるだけではなく、《enuntiabile》としても異なるのである。「キリストが生れる」と「生れた」と「生れるであろう」とは、トマスにおいてはまさに「ことがら」として異なるのである。「在る」「在った」「在るであろう」という時の区別は、ことがら自体の本質に属さない偶然的なことではなくて、まさにことがらの本質に属し、それ自体、ことがらの本質を構成する本質的要素なのである。したがって神は「在る」「在った」「在るであろう」という時間を超越した「キリストの生誕」なることがらを永遠不変に知っているだけではなく、「キリストが生れるであろう」ことを知るとともに「生れる」ことを知り「生れた」ことを知る。単に「キリストの生誕」を知るのみならず、その生誕がいつ起るかを知るのである。唯名論者とトマスとの相違を簡単にいえば、《enuntiabile》の中に特定の時称によって限定された存在（これを以下に時間的存在という）を含ませるか否かにある。トマスはその中に時間的存在を含ませる立場において、それを含ましめない唯名論者の説を偽であると断定するのである。しかし唯名論者は《enuntiabile》の中に時間的存在を含ましめず、それをいわば永遠化することによって、時間的なことがらに関する神の知を時間の変動から守り、神の知の不変性を擁護することに成功したように思われる。時間的存在を《enuntiabile》の中に含ましめたトマスは、これとは逆に神の知を事物の時間的転変にいつそう近づかしめ、その結果、神の知の不変性をおびやかす危険に臨むのではなからうか。トマスはこの危険をどのように切り抜けるのであろうか。

6. トマスが唯名論者の説を偽とする第二の理由は次のものである。すなわち、もしこの説に従うとすれば、ひとたび真である命題は常に真であることになるであろう。sequeretur quod propositio quae semel est vera, esset semper vera: しかしこれはアリストテレスの説に反する。その説によれば、「ソクラテスは坐っている」という命題は、ソクラテスが坐っている限り真であるが、立てば偽となるのである（アリストテレス『カテゴリア』第5章4 a 23—26）。—アリストテレスによれば、「在るものを在るといい、無いものを無い」というのが真であり、「在るものを無いといい、無いものを在る」というのは偽である。ここに「在るもの」「無いもの」とは、実在の世界に起っている、或いは起っていないことがらであり、いずれにし

でも実在の領域に属する。これに対し「在るといい」「無いという」のは知性であり、知性は実在についての自己の判断を「在る」「無い」という命題の形で表現するのである。たとえば「ソクラテスは坐っている」という知性は、「坐っているソクラテスが在る」ということを述べているのである。この命題が真であるのは、この命題によって表わされていることがらが実在の領域において事実として起っている場合である。すなわち「ソクラテスは坐っている」という事実が在る場合には、「ソクラテスは坐っている」という命題は真である。もしソクラテスが立つならば、同じ命題は偽となる。かくて、同一の命題がそれに対応する事実の世界における事態の変化に応じて真となったり偽となったりする。その意味で命題の真理は可変的である（この問題については、第16問8項において詳論される）。ところでこのように命題に真偽が属するのは、命題によって表わされていることがらとしての《enuntiabile》と、実在の世界に事実として起っていることがらとの間に対応関係が存在し比較することができるからに外ならない。「ソクラテスは坐っている」という命題によって表わされることがらとしての《enuntiabile》と、実在の世界にソクラテスが坐っているという事態が起っている、起っていないということを比較できる関係にあるからに外ならない。一般化していえば、「(S P)が在る」という命題によって表わされていることがらとしての《enuntiabile》と、実在の世界に(S P)なることがらが事実起っているか否かを、その対応の有無を考察できる関係にあるからに外ならない。そのためには《enuntiabile》は是非ともその中に、単に(S P)だけでなく(S P)が「在る」「在った」「在るであろう」といういずれかの時間的存在を含まなければならない。もしも《enuntiabile》がこれらの時のいずれをも含まず、ただ(S P)だけが《enuntiabile》の内容をなすのであるならば、たとえば「坐っているソクラテス」だけが《enuntiabile》の内容をなし、そこから「在る」「在った」「在るであろう」の時間的存在が除外されているならば、かかる《enuntiabile》は、実在する世界に生起する事態とは無関係となり、命題を事実と比較して命題の真偽を決定することもできなくなる。かかる時間的存在ぬきの《enuntiabile》のみを認識している知性がもしあるとすれば、かかる知性は常に真であるともいえるし、常に真でないともいえる。要するにかかる知性は、時間的世界に起る出来事についての判断は一切なしえず、全く無縁となってしまうのである。

ゆえに命題が事態との比較において真偽の価値を有しうするためには《enuntiabile》はそのうちに時間的存在を含まなければならない。この点からいっても《enuntiabile》から時間的存在を捨象して、ただ(SP)のみを《enuntiabile》であると主張する唯名論者の説は偽であることになる。

7. 唯名論者の主張の偽である理由を説明した後にトマスはいう。—それゆえ「神は知っていたことを悉く、今も知っている」ということは、もしそれが《enuntiabile》に関係づけられるならば、真ではないということ認めなければならない。Et ideo concedendum est quod haec non est vera, *quidquid Deus scivit, scit, si ad enuntiabilia referatur*. —ここで《enuntiabilia》と複数にされていることに注意しなければならない。唯名論者たちにとっては、「キリストは生れるであろう」「生れる」「生れた」の表わすことがら一つの《enuntiabile》であり、その内容は「キリストの生誕」であった。神はこの「キリストの生誕」という一つの《enuntiabile》を知る限り真理を知っているのであり、キリストが時間的世界にいつ生れようと、それにかかわりなく一つの「ことがら」を知っており、その意味で神の知は不変である。そのような立場において彼らは、「神が知っていたことを悉く、神は今知っている」Deus quidquid scivit, scit. といったのである〔本論文第4節〕。しかしトマスによれば、この《enuntiabile》の扱え方は誤りであり、「キリストは生れるであろう」「生れる」「生れた」という三つの命題に対応するのは、一つの《enuntiabile》ではなくて、三つの《enuntiabilia》である。ゆえにこの三つの《enuntiabilia》に関係づけられる限りにおいては、「神は知っていたことを悉く、今も知っている」といえなくなり、これは真ではない *haec non est vera* ことになるのである。なぜならば、キリストの生れる迄真であった「キリストの生れるであろう」! という命題の表わす《enuntiabile》は、生れた後には真ではなくなり、その意味では異論のいうとおり、キリストの生れた後は神は「キリストは生れるであろう」ということを「知らない」といわなければならないからである。その限りにおいて、「神が知っていたことを悉く、今も神は知っている」という唯名論者の主張は真でなく、却って、「神が知っていたことを悉く、今神は知るのでない」*non quidquid Deus scivit, scit.* という異論の主張の方が正しいと考えられるのである〔本論文第2節〕。一この

場合注意すべきは、神が「知る」とか「知らない」とかいうことの意味である。上記の主張において神が「知る」とか「知らない」とかいはれる場合、神は「何を」知るのであるか、或いは知らないのであるか。それは《enuntiabile》が「真であるということ」である。すなわち、キリストの生れる以前神は「キリストが生れるであろう」ことを知っていたといわれる場合、このことは厳密にいうならば、「キリストが生れるであろう」という《enuntiabile》が「真であることを」知っていたのであり、生れた後神がこのことを「知らない」とは、この《enuntiabile》が「真であることを」知らないのである。もし依然として「真であることを」知っているとすれば、神の判断に誤りがあることになるであろう。そういうことはありえないから、神は今ではこの《enuntiabile》が真であることを「知らない」といわなければならないのである。それゆえ「神が知っていたことを悉く、今神は知らない」という異論の主張は、その正当性を認めるとしても、厳密に表現するならば、「神はかつて真であると知っていたことを悉く、今も真であると知るわけではない」というべきであろう。

8. トマスは以上、二つの理由にもとづいて唯名論者たちの説を斥け、むしろ異論の説を支持する方向に近づいたのであるが、これによって問題の解決を却って困難ならしめているように思われる。唯名論者たちが《enuntiabile》の中にただ(S P)のみを含ませ、時間的存在の附加を非本質的なこととしてそこから除外し、神はただかかる《enuntiabile》のみを知っていると主張したのは、神の知を被造的世界の時間的転変から守るためであり、いわば神の知を時間的転変の汚れに染めないためであった。「坐っているソクラテス」を知っている神は、現実のソクラテスが坐ろうと坐るまいと、そのような時間的世界の出来事の転変には一切かわりなく真理を知っているのであり、従って神の知は絶対に誤ることがなく、変ることもない。しかるにトマスのように考えるとどうなるか。トマスによれば《enuntiabile》は単に(S P)だけで構成されるものでなく、時間的に限定された存在をもその本質的部分のうちに含んでいる。トマスにとっては、「(S P)が在る」「(S P)が在った」「(S P)が在るであろう」がそれぞれ別個の《enuntiabile》なのである。具体的にいえば、トマスにとっては、単なる「キリストの生誕」ではなく、「キリス

トが生れるであろう」「キリストが生れる」「キリストが生れた」が、それぞれ別個の《enuntiabile》なのである。このように解することにより始めて、《enuntiabile》と現実の世界に生起する事態との比較が可能となり、《enuntiabile》に真偽の価値を与えることができるようになる。しかしかかる《enuntiabile》を神に適用するとき、まさしく異論の提起した問題が生じてくるのではないか。すなわちもし《enuntiabile》がそのようなものであるとするならば、キリストの生れる前、神は「キリストが生れるであろう」という《enuntiabile》を知っていた筈である。そしてキリストの生れる迄は、この神の知は真であった。問題はキリストが生れた後に起ってくる。キリストの生れた後、「キリストは生れるであろう」という《enuntiabile》はもはや真ではない。ゆえにもしも神がキリストの生れた後もなお依然としてこの《enuntiabile》を知っているとすれば、神の知と現実起っている事態との間にくいちがいを生じ、神の知はあやまっていることになる。これは容認できない。ゆえに神の知は常に真であると主張しようと思うならば、神はキリストが生れると同時に、「生れるであろう」という《enuntiabile》の知をすてて、その代りに「キリストは生れた」という《enuntiabile》の知を取ったと考えなければならない。これは神の知に可変性を認めることであり、「神がかつて知っていたことを悉く、今も知るわけではない」という異論の主張に屈することである。神の知の絶対真実性を守ろうと思うならば、唯名論者の道をとらない限り、神の知の可変性を認めることは、けだし止むをえないことのように思われる。トマスはこの難問をどのように切り抜けるであろうか〔本論文第5節末尾の部分を参照〕。

9. 「神は知っていたことを悉く、今も知っている」という主張を、唯名論者が解する意味では真ではないと断定し、その限りにおいて、「神は知っていたことを悉く、今も知っているわけではない」という異論の主張に同意するかのように見えたトマスは、それにもかかわらずここから異論のように、「ゆえに神の知は変りうる」という結論には赴かなかった。却って反対に、「しかしここから（異論の主張するように）、神の知が変りうるということは帰結しない」Sed ex hoc non sequitur quod scientia Dei sit variabilis. というのである。それはいかにしてであるか。トマスはいう。一神はその知を変えることなしに、同一の事物が或る時は存在し或る時

は存在しないことを知る。 *absque variatione divinae scientiae est, quod sciat unam et eandem rem quandoque esse et quandoque non esse.* — 時間的世界に存在する事物は、或る時は存在し或る時は存在しない。われわれは事物について「そのものは在る」とか「そのものは無い」とかいう。これらの命題にはそれぞれ「そのものは在る」「そのものは無い」という命題によって表わされている《enuntiabile》が対応する。「そのものは在る」という《enuntiabile》が真であるのは、現実の世界に事実そのものが在る場合であり、偽となるのはそのものが無い場合である。われわれの知がいつも真実であるためには、われわれの知は現実の世界に生起している事物の「在る」から「無い」「無い」から「在る」への変化に即応して、たえず「そのものは在る」から「そのものは無い」へ、或いは逆に、「そのものは無い」から「そのものは在る」へと修正されてゆかなければならない。それゆえ現実の世界に存在する事物に関するわれわれの知は必然的に可変的である。ところが神は、やはり世界のうちに或る事物が或る時は存在し或る時は存在しないことを知るが、それによって神の知が変ることはない。神とわれわれとの、事物の存在の認識におけるこの相違は何に起因するのであろうか。それは、時間的世界に存在する事物について知るわれわれが、われわれ自身その時間的世界のうちに存在し、時間的に転変する事物を時間的な認識者の仕方でも認識しなければならないのに対し、神は永遠の立場からこれを認識するという点に在る。時間的世界の中に生きているわれわれは、時間的世界の中に転変する事物についての知を、それらの事物そのものから取るのであり、主語となるものに述語となるものを結合し或いは分離するという仕方でも《enuntiabile》を造る。そのときこの《enuntiabile》の中には、必ず「在る」「在った」「在るであろう」或いは「無い」「無かった」「無いであろう」が含まれ、この「在る」「無い」が、現実の世界に生起している出来事の「在る」「無い」に合致するか否かによって、われわれの有している《enuntiabile》は真になったり偽になったりする。これに対し神においては、神は時間的世界における諸事物から事物に関する知を取るのではない。却って反対に、神の知が事物の原因なのである〔第14問8項〕。神が知るように、まさにそのように事物は存在するのである。或る事物が「在る」から神がそれを「在る」と知るのではない。却って神が「在る」と知るようにまさにそのように事物は「在る」のである。それゆえ神の事物についての知は

常に真であり、偽となることは絶対にありえない。ところで神は事物が単に「在る」ことを知るのみではない。それぞれの事物について起りうる一切のことを知るのである。したがって神の事物についての知のうちには、その事物がいつ在り、いつ無くなるかということも含まれている。かくて神は、すべての事物についてその各々がいつ存在を始めいつ存在をやめるかを知る。しかもそのことをわれわれのように、事物の転変に即して知るのではなく、事物の存在に先立ち永遠から不変の一つの知において知る。神は事物の転変する時間的存在にかかわる一切のことがらを、神の知そのものに何らの変化も生ずることなしに *absque variatione divinae scientiae* 知る。かくて可変的事物の時間的存在についての神の知は不変である。

10. このことは、既に本項（第15項）以前の諸項（特に第13項）において述べられたのであるが、それと同様のことが《enuntiabile》に関する神の知についてもいわれうるとトマスはいう。Sicut... ita... すなわち、神はその知を変えることなしに或る同一の事物が或る時は在り或る時は無いことを知るのであるが、それと同様に神は、その知を変えることなしに或る《enuntiabile》が、或る時は真であり、或る時は偽であることを知るのである。 *absque variatione divinae scientiae est, quod scit aliquod enuntiabile quandoque esse verum, et quandoque esse falsum.* 一具体的な例をとって考えてみよう。トマスによれば、神はキリストが生れることを知っている。それも、唯名論者たちが主張するように、時間的存在から抽象された「キリストの生誕」なるものを知っているだけではない。「キリストの生誕」が時間的世界の中でいつ存在するかも知っている。そして神はキリストが生れるその時迄は、「キリストは生れるであろう」という命題が真であることを知り、生れた後は、「キリストは生れた」という命題が真であることを知る。ここまでは異論もトマスも共通に認める。しかしこれから先がちがう。異論はここから、ゆえにキリストが生れるとともに「キリストは生れるであろう」という《enuntiabile》をすて（なぜならこれを保持することは、神が偽の命題を保持することになるから）、それに代って「キリストは生れた」という《enuntiabile》をとると考える。ここから「神の知は変る」ということが結論される。この異論の主張の根拠には、「神が偽の命題を保持する筈はない」ということが前提されているのである。まさにこの点においてトマスは異論

と意見を異にする。トマスによれば、神は偽の命題をも保持するのである。それはいかにしてであるか。トマスによれば、上に述べられたように、神はキリストの生誕がいつ起るかを知っている。それとともに（以下に述べることに注意せよ！）、神はキリストが生れる迄、「キリストは生れるであろう」が真であることを知っている。それとともに神はまた（この点が肝要！）、キリストが生れた後は、「キリストは生れた」が真となり、「キリストは生れるであろう」が偽となることをも知っている。つまり神は、「キリストは生れるであろう」「キリストは生れた」というそれぞれの《enuntiable》がいつ迄真でありいつから偽となるか、いつ迄偽でありいつから真となるか、ちゃんと知り抜いた上でこれらの《enuntiable》をふたつとも保持しているのである。それゆえ神は、異論が主張するように、キリストが生れる迄は「キリストは生れるであろう」を保持していたが、生れるとこれをすて、代りに「キリストは生れた」をとることはない。前者がいつまで真として妥当し、いつから偽となるかをちゃんと始めから心得た上でこれらの《enuntiable》を保持している神にとっては、すべては神の知の通りに起っているのである。それゆえ時間的世界の転変におうじて、或る《enuntiable》をすて或る《enuntiable》をとる必要は全然ないのである。その意味で時間的世界における一切の転変を知悉しているにもかかわらず、神の知は不変である。そしてかかる見地において、いったん否定された唯名論者の「神は知っていたことを悉く、今も知っている。」*Deus quidquid scivit, scit.* という主張は、トマスの立場から再び肯定されるであろう。ただしその場合、この主張の意味は、「神はかつて真であると認めていた《enuntiable》を、今でも悉く真であると認めている」ということではなくて（その意味にとるならばこの主張は容認できない。本論文第7節参照）、「神はすべての《enuntiable》を、その各々がいつ真でありいつ偽であるかを知った上で知っていた。そのように神は今でも同じことをすべて知っている」という意味になるであろう。

11. 最後に、いわゆる唯名論者とトマスとの間に《enuntiable》の本質について生じた意見の相違は、何に起因するものであるかについて考えてみよう。既に述べられたように、唯名論者たちは「キリストの生誕」を《enuntiable》の本質となし、「生れる」「生れた」「生れるであろう」という時間的存在の相違はその本質には属

さないと考える。一般的にいえば、(S P)が《enuntiabile》の本質であり、(S P)が「在る」「在った」「在るであろう」は《enuntiabile》の本質には属さないと考える。つまりいつ在るかということは「ことがら」自体にとっては本質的なことではない。そして神はひたすら、このような時間的存在とは無関係な《enuntiabile》のみを知るのである。そのことがらが時間的世界にいつ起るかということは、神にとっては全くかかわりのないことなのである。これに対しトマスにとっては、《enuntiabile》とは、そのうちに時間的存在を本質的に含むものであり、単なる(S P)ではなく、「(S P)が在る」「(S P)が在った」「(S P)が在るであろう」が、それぞれ別個の《enuntiabile》を成している。そして神はこれらの《enuntiabile》を悉く知るのであり、したがって神にとっては、単に(S P)だけではなく、その(S P)が時間的世界にいつ起るかということが本質的関心事となるのである。《enuntiabile》に関する両者のこの見解の相違は、いかなる所にその原因を有するであろうか。それについて考えるために、まず唯名論者の意味での《enuntiabile》がいかなる領域において妥当するかについて考えてみよう。「在る」「在った」「在るであろう」という時間的存在の転変にかかわらず、(S P)だけをその本質とする《enuntiabile》が妥当する領域は「永遠の真理」*veritas aeterna*の領域であろう。たとえば「三角形の内角の和は二直角である」という《enuntiabile》は、いちおう「である」という現在で表わされているが、この「ある」は「在る」「在った」「在るであろう」とめまぐるしく転変する時間的存在の現在形ではない。「三角形の内角の和は二直角である」という《enuntiabile》は、いつまでも妥当するのであり、在る、在ったは問題ではない。(尤も、非ユークリッド幾何学が成立してから、この定理は無条件に永遠の真理とはいえなくなったが、それにしても或る条件のもとにおいては依然としてそれは永遠の真理である。そして非ユークリッド幾何学成立以前においても、事態は同じであったのであり、ただこの定理がそのもとにおいて永遠の真理として成立つその条件が、それまで人々によって発見されなかつただけのことである。)一般に、現実の時間的世界をこえて普遍的に妥当する命題がとりあつかわれる領域においては、(S P)を《enuntiabile》の本質とする唯名論者の主張は妥当する。そしてこの領域において、トマスによって否定された「ひとたび真である命題は常に真である」*propositio quae semel est vera, esset semper vera.* とい

うことは、真実に妥当するのである。〔本論文第6節〕。ただしその場合、かかる《enuntiabile》のみを知る神は、幾何学する神であり、幾何学者である限りにおける幾何学者の神であろう。これに対し「在る」「在った」「在るであろう」という時間的存在をその本質のうちに含む《enuntiabile》は、必然的に「在る」「在った」「在るであろう」と目まぐるしく転変する時間的世界にかかわってくる。かかる世界に存在するのは個物であり、かかる世界に関する命題の主語は、必然的に個物となる。そしてその命題は普遍命題ではなく、個別命題となる。トマスがあげる命題の例は、「キリストが生れる」「ソクラテスは坐る」など、個別命題である。かかる命題の真偽は(S P)ではきまらない。「キリストの生誕」「坐るソクラテス」だけでは真とも偽ともいえない。その真偽が問われるためには、この(S P)に「在る」「無い」がつかなければならない。その「在る」「無い」も、普遍的永遠的な「ある」「ない」ではなくて(かかる「ある」「ない」は(S P)に附加されるものでなく(S)と(P)との結合ないし非結合を示す記号である)、時間的存在としての「在った」「在るであろう」に対して現的存在という意味を有するものでなければならない。かかる時間的存在を含む《enuntiabile》を、トマスの神は知る。知ることによって神は、この時間的世界の中に介入してくる。ただし、既に存在するものとしての時間的世界の中に介入してくるのではない。神の知は時間的世界の原因であるから、時間的世界に生起する一切の出来事は、まさにかかる《enuntiabile》を媒介として神によって在らしめられ、それにしたがって転変するのである。このように見てくるならば、かかる《enuntiabile》のトマスの把握の根底には、時間的世界を《創造する神》が存していることが知られるであろう。